

同朋社会をめざす会を代表して質問させていただきます。

私たちが、宗教者として、真宗大谷派という教団、組織を形成しているということは一体どういうことなのか、その意味はどこにあるのかということ考えた時、私は、思想、あるいは宗教的精神、私たちにとっては真宗大谷派なる宗教的精神といわれるもの、それを運動、つまり念仏として表現することだと言おうと思います。

法然、親鸞によって確立された専修念仏の運動、そして、なканずく親鸞による往還二回向の教学、それは浄土真宗というものが、真にグローバルなものとして、まさに釈尊以前の仏教として、獲得されたということであるといっているのしょう。

具体的には宗門内外の人々に親鸞聖人の言葉を届けることによって、人々の魂にふれる変革を、宗門、そして現代社会に生み出すことに外なりません。私たちは昨年9月、その課題を宗議会の中で担うため「同朋社会をめざす会」を結成しました。それは宗議会の中に真宗大谷派という教団に「世界人類の安心を求めんと期する所の源泉」という責任を感覚する未来を担う人たちの参加の呼びかけでもあります。

三國連太郎さんと親鸞について

さて、親鸞という人に私たち以上に魅惑された三國連太郎さんが去る4月14日親鸞と同じ90年の生涯を終えられました。ご承知のように三國さんは26年前1987年「白い道」という映画を10数年かけて制作され、その映画「白い道」はカンヌ映画祭で審査員特別賞を受賞しました。そしてそのことは少なからずの驚きを、それも親鸞を知っているつもり、あるいは親鸞を知っていた私たち日本人に与えた。

多くのご門徒の方々も見て下さったのだが、そのほとんどはよくわからなかった、画面もなんか暗くて、ところで親鸞さんの映画だと聞いてみたのだが、親鸞さんは出ておられたのかね、という声が出るほどだった。親鸞を知っているつもり私たち日本人、それはご門徒だけでなく、多くの親鸞に関心のあるご門徒以外の方々にとってもそうであったことは、当時の映画「白い道」に対する日本での評価からもわかることである。その映画がカンヌ映画祭で審査員特別賞をとったというのだ。

なぜ世界には通用しても、日本人にはわからなかったのか。そのことは同時に、世界に通用する親鸞、グローバルな親鸞、いわば「もうひとつの親鸞」は今も語られてはいないということかもしれません。

これらのこととも関係のあることですが、今回の三國連太郎さんの死を報ずる現代のメディアに、三國さんと親鸞との関わりがほとんど、というより全くと言っていいかもしれません、でてこないというところにも現代の日本の宗教というもののとらえ方、宗教観があるともいえるのかもしれませんが。

戒名はいらない、散骨してほしいといわれたという、三國さんの正確な遺志を、少なくとも私はきちっと受け止めなければならないと感じています。

さて、その三國連太郎さんが、30 数年前このように述べられています。

『さしあたっての無難を願う』という小さな我執が人びとの心の中にあるために、支配権力はまことに都合よく人びとをだましうちにするのできるのです。私たちはその心弱い部分を正当化する。合理化する。そこに権力はついています。人びとの心の底に巣くっている自己保身のエゴイズム、それを正当化しようとする考え方や観念を自力分別心というのです。この自力分別を積み重ねていくと、小さな保身の思いがやがて社会全体をおおい、非人間的な深い亀裂と断層をもたらします」と。

言い当てた言葉というものは常に、現在という時代を表現しているものです。現在の状況の中で、私は、そして私たち真宗大谷派なる集団はどのような歩みをしようとしているのか、そのことを問い続けている言葉でもあります。

空洞化の時代について

総長は「現代という時代は、一言でいえば『空洞化』の時代であります」と述べられました。まさにその通りだと思います。

さて、その「空洞化」を埋める手立て、それも浄土真宗を生きようとし、それを「伝えよう」とする私達には一体何が必要なのでしょうか。

今年の春の法要期間中、ご承知のように教如上人 400 回忌法要が勤められました。対外的にも、あるいは内部でも、不思議に通常はほとんど注目されることのない教如上人でしたが、今回は少し話題になったと言っていいのかもしれませんが。修復中の阿弥陀堂での初めてととってもいい教如展も開催され、多くの人たちが訪れました。そこで信長、秀吉、家康といういわゆる天下人三人と、大桑斉先生の表現では「鳴かぬホトトギス」として渡り合ったという人間像としての教如上人が紹介されました。

「鳴かぬホトトギス」とは、親鸞の表現で言えば、非（あらず）ということでしょう。親鸞の「非の思想」がそこに表現されていると言っていいでしょう。

そこでその教如上人という人に刺激を受けて、宗教と政治や経済等との関わり方を考えてみようと思います。

敗戦後の混乱の中、自己自身の戦前・戦中を振り返りながら、還相回向とい

うことの意義を新たに表現し始められた曾我量深先生は、同じ頃 1949 年 10 月『真人』誌で次のように述べられています。

「私は信仰運動というものも矢張り非常に高い意味での政治性を持って居らねばならぬと思いますが一真人というものは宗門などに目をつけなくて、宗門を背景にして宗門全体がもっと目覚めるように一外から批判するというのでなしに、自分も亦批判を受ける立場に身を置いて、大きな社会というものに対して、自分を磨いて行くものでありたいと念願して止まない。これは恐らくは教如上人が新しく東本願寺というものを創立された精神というものに相通ずるに違いない」と。そしてその後の東西本願寺における教学の方向性の違いにも触れられています。

さて、総長の言われる「空洞化の時代」、それは、今や日本だけでなく世界中にその状況が蔓延しているというべきかもしれません。

メディア・ファシズムとでも言うほかないような中でのこの日本の政治状況は、3.11 以降、いよいよ混乱を深めているように思われます。

そのメディアと経済界とに迎合し、野合していると言っていい現政権はアベノミクス等という表現で、グローバル企業、多国籍あるいは無国籍企業のロジック(論理)でもって強い日本を取り戻さんとして、7月の参議院選に向けて様々な政策が取られています。私にはこれらの政策は、日本という国を再び壊すことになるのではないかという不安がありますが、それはそれとして、それらの政策に対して、好意的、楽観的、懐疑的、悲観的、さまざまな論議がなされています。

そんな中で、私たち浄土真宗を生きようとする者は、それらのことに対してどのような態度を取るべきなのでしょう。

日蓮聖人の言葉に学びながら、他方親鸞を深く信仰の問題として考え続けてくださった上原専禄先生は、宗教と政治の関わりについて、次のように述べられています。

「経済や産業や社会の問題をもひっくるめて、それが生きた形で動いている全体を政治ということではぼってみるならば、政治は「現世的なもの」の集約であるといえましょう。そして宗教の宗教性を最も発揮できるのは、こうした意味での政治に対決するときにおいてであると、私は思うのです。宗教は政治に従属するものでもなければ、宗教問題は結局政治問題に帰着するものでもありません。しばしばいわれますように、宗教は政治ではなく、また政治であってはならないのであります。しかし、政治とのかかわりあい抜きにして、いったい宗教がその宗教性を実現することが可能かどうかということ、宗教自体の側の問題として考えますとき、私としましては、どうしても政治との対決の重要性を強調せざるをえないのです」と。

また、

「政治の問題を、具体的に現実的に掘りさげてゆくこと自体が安心を確立する道であり、さとりに到る道であるとする立場が、教義的にも信仰的にもなりたちうるわけだと思います」とも述べられています。

ここに親鸞の「非の思想」と政治との関わり方が余すところなく述べられていると言っているのではないのでしょうか。

憲法に関して、原発に関して、TPP に関して、死刑問題に関して、アベノミクスに関して等々、さまざまな社会の問題に関して、「安心を確立する道」として対決していくことの大切さを強調されています。

「対決する」とは、言うべきことを、言うべき時に、言うべき場所で、言うべき人に向けて「きちっと」言うこと以外の何ものでもありません。憲法改悪に関しては、非戦決議を決議した私たち今まさに発言すべき時でしょう。私はそれらのことにこそ「空洞化の時代」を埋める鍵があると考えていますが、いかがでしょうか。

真宗同朋会運動についてですが

さて、51年目を迎えた真宗同朋会運動の課題と展望を整理した同朋会運動推進に関する委員会の報告が出されたのが、ちょうど一年前の5月31日。そこでは、「人の誕生」と「場の創造」という言葉が作られました。が、実質的には何一つ手が付けられていないというのが実情ではないのでしょうか。

ところで、その報告の中で「すべきである。しなければならない。必要がある。いくべきである。etc」の言葉が本当にたくさん使われているのに驚きます。

むしろ同朋会運動が課題にできなかったことの点検、確かめの方が大切だと思うのですが、いかがでしょうか。

そのいくつかの項目に簡単に触れてみたいと思います。

まず、浄土です。同朋会運動の中で語られた浄土とはどんなものだったのか。いや、浄土が語られたのだろうか。何となくある、死後の浄土観、それ以外にどんな浄土が語られたのだろうか。それは、真仏土巻、化身土巻があまり読まれていないこととも関係があるだろう。その浄土がはっきりしないということによって、一番の問題は国家を相対化できなかったということである。これは同朋会運動50年だけのことだけではなく、一向一揆敗退後の徳川幕藩体制以降の浄土真宗というものがそうだとと言えるかもしれない。国のため、ハンセン病、戦争、原発等、いわゆる国策に無批判に絡め取られてしまった私たちの真宗教団、それに加勢した真宗教学、それは同朋会運動の中でもあまり変わらなかったということでもありました。例えば、ハンセン病療養所で慰問布教として語

られた浄土は、残念ながら療養所の人々を立ち上がらせることはなかったと考えられます。

いわゆる国民国家の崩壊がいわれている現代、この浄土の思想こそが、経済、お金とは全く違う論理でもって、グローバル化を可能とする意味を持つものではないでしょうか。

次は念仏です。念仏が語られない等という、変なことを言うなど言われそうであるが、実はそうではない。同朋会運動の中で信心は強調されたが、念仏ということはあまり言われなかったのではないだろうか。念仏が語られなかったということは、何よりも真宗門徒としての表現を何もしていないということである。一つ一つの事象に対して、私は真宗門徒だからこうするのだ、ということはほとんどなかったのではないだろうか。もちろん誰もがそうだということではありませんが。

このことは、同朋会運動が念仏者を生み出せなかったこととつながっている。乱暴に言えば、信者や学者は生まれたが、行者が生まれなかったのである。念仏は、念仏そのものの用きとして、知的格差をはじめとして、あらゆる格差を解消する力を持った言葉として、私たちに届けられているものである。

このことは次のこととつながっている。課題にできなかったことの第三番目、それは同朋会運動で蓮如が語られなかったということである。同朋会運動はある意味で、蓮如を無視するような形で進められたと言えれば言い過ぎだろうか。そのことは、当然のこととして同朋会運動が運動にならなかったということと深いつながりがある。あるいは純粹なる信仰運動にならなかったということでもある。足利演正先生、藤元正樹先生等が中心になって教学研究所で「相伝義書」の出版、そしてその学習がはじめられたが、そのことの意味が、今もなおはっきりしているとは言い難いが、そのことはこれからの真宗教団のキーポイントの一つだと思われる。

蓮如の運動は、どこまでも名号を中心にした運動である。だから運動にまでなったのであります。名号、南無阿弥陀仏を中心にした運動は、当時の人々に、先ほども触れたように何よりも知的格差を解消させ、自分で考える人間を大量に生み出したのであります。

敢えて言えば「親鸞に帰ろう」でもないし「宗祖としての親鸞聖人に会う」でもない。マルクス・レーニン主義や毛沢東主義 etc 個人名を冠にする運動ではないというポイントが名号というところにあつたのだと考えられます。

次は儀式、仏事の問題であります。このことは竹中智秀先生は習俗との関係としても取り上げられています。そのことと深い関係があるのですが、この課題は、経済構造の問題と言えるでしょう。真宗大谷派教団における懇志、財源の問題であります。相続講制度、同朋会員志、はたまた同朋会運動推進負担金

等、これらのこととも深い関わりを持ったことだと言えるでしょう。取り込むこと、利潤の追求ではなく、与えること、布施ということから始まるのが六波羅蜜の行、仏教における行です。日本国憲法前文や第九条を支える精神でもあるのではないのでしょうか。当然それは同時に原発の廃止ということも可能にする原理でもあります。柄谷行人氏が日本国憲法、特に第9条を改めて世界に宣言し、段階的に軍備を廃棄していくということを「贈与」という言葉で提起されていますが、まさにそれは「布施」であります。真宗の経済学が求められることです。

さて最後に、同朋会運動が課題にできなかつたこととして、個の自覚ということを目指したいと思います。同朋会運動の最初のスローガン、「家の宗教から個の自覚へ」の個の自覚ですが、それに関しては言葉としては発信されたが、全く課題にはできなかつたと言わねばならないと思います。それどころか家の崩壊と共に、家の宗教そのものの崩壊と共に教団としての力も弱体化していつていると言っているでしょう。

私はこの個の自覚ということを目指せることができなかったのか、気になっていました。そのことに決着がついたのが、10数年前の阿部謹也さんの著書「日本人の歴史意識―世間という視点から―」との出会いです。阿部さんの、世間論は前から知っていたつもりでした。しかし、私の問題意識がはっきりしていなかったということです。10数年前、改めて阿部さんの世間論と出会って、あつと思いました。個の自覚が伝えることができなかったのは、私たち自身が「世間」の中でしか語っていなかったということです。その象徴が「見真額」を仰ぎ見るような形式の中で語られる親鸞、それはまさに「世間」の出来事であつて、「浄土の真宗は今盛りなり」の親鸞の浄土真宗ではないと言わねばならないでしょう。まさに「もうひとつの親鸞」が求められています。

現代の日本における個の自覚は、「世間から出る」のではなく「世間へ出る」ことのできる宗教的原理「親鸞・一人になることのできる宗教」でなければならないでしょう。

現代日本社会において、一人になるために、そして「世間へ出る」歴史に参加するためにために、阿部謹也先生の提起を改めて思うことです。

「しかし「世間」の中で個人を解放してゆく道は極めて困難な道である。しかも私たちは歴史への接点を求めているのである。「世間」の中にありながら、歴史を自分自身の体験として身近に引き寄せるためにはどうしたらよいのだろうか。何よりもまず個人が「世間」から自立しなければならない。そのためには「世間」と闘わなければならないのである。「世間」は個人が突出することを好まない。全体として「ことなかれの体質」をもっている。その中で自分の資質を伸ばし、自分の主張を貫いてゆくためには闘わなければならないのである。

「世間」と闘うことによって私たちは歴史への展望をも開くことができる。多くの人が「世間」の中で安住し、歴史を「世間」の外で演じられているドラマとしか見ていないときに、自ら直接歴史と出会い、歴史を描くためにはまず「世間」と闘わなければならないのである。歴史は闘う者にしかその姿を現さない」と。

「人の誕生」「場の創造」という言葉も大事ですが、それらの言葉に意味をもたせるためにも、まず、同朋会運動で課題とできなかつたことの確認、そしてそれは何故だったのか、その克服のために何が必要なのかを検討することこそが最初なのではないでしょうか。「すべきである」「しなければならない」「必要である」からはあまり創造的なものは生まれません。

そこで質問します。

真宗教化センターについてですが、

教化の基本である教学、特に教化センターにおける教学としては、ある意味で運動としての教学（キリスト教で言われた解放の神学のようなもの）が求められていると考えますが、そのような方向性を持った教学の生まれる可能性はあるのでしょうか。

宗祖親鸞聖人のいわれる言葉どおりの真宗教学、それは今の宗門内だけで可能であるとはとても考えられません。宗門内外の心ある人々とともに、スケールの大きな真宗教学の創造が必要だと思われまます。真宗政治学、真宗経済学、真宗環境学、真宗科学、真宗医学、真宗教育学、真宗情報学、真宗人権学、真宗女性学等々。せつかくの真宗教化センターの設立です、夢のようなことに本気で取り組んでみるつもりはありませんか。

教区、組との連携がいはれていますが、最初本山からの呼びかけで立ち上がったものの、その後は支援のない、例えば山陽教区の事例では真宗カウンセリングに取り組んでいる、「フリースペース群生海」がありますが、それらの実質的な支援もこれからは考えていただきたいものです。

反原発を社会に表明している宗門として、そのことを対社会に鮮明にする上から、また、両堂修復事業の折、屋根をソーラー化すべしという提案に対して、今後同朋会館をはじめ諸施設については極力ソーラー化を考えていきたいとの答弁があったかと記憶していますが、これらの点からも、そしてまた教団の社会的アピールとしても、教化センター正面南側屋根の全面ソーラー化への設計変更をぜひお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

親鸞仏教センターについて

同センターが学事施設として設立されて 10 余年。その間、総長は同センターを「真宗の教えを現代の言葉で探究、表現していく重要な実践的研究機関」と評されています。

しかし、定期出版の「アンジャリ」「現代と親鸞」は講演、交流の記録のみにとどまっていると思います。その出版物の購読層ならびに購読数はどのようになっていますか。(有料・無料合わせて)

また、現代の様々な問題、憲法問題、原発問題等々にどのように応答できるかとの課題を 10 余年たった今、その成果を同センターのどのような現代社会へのアプローチとして見出されているのでしょうか。

それらのことと関連すると思いますが、首都圏の寺院や首都圏開教寺院と親鸞仏教センターとの関係はどのような形になっているのでしょうか。

海外開教について

アメリカ真宗センターの再構築とのことですが、具体的にはどんなことが考えられているのでしょうか。

北アメリカ、ハワイ、南アメリカ開教区ではキリスト教圏での開教ということであり、また仏教といえば禅、メディテーションだと考えられている欧米の宗教観の中に真宗仏教を表現するための基礎作業としても、例えば、開教使の方々による真宗入門カリキュラム（仮称）のようなものを作成する（つまり日本のものを翻訳するのではなく）つもりはありませんか。

海外司教さんが任命されていますが、具体的にどんな動きをされていて、それぞれの開教区での受け止め方はいかがでしょうか。

国際室としてアジア諸国との関係はどうなっているのでしょうか。中国仏教会や韓国仏教会とは今どんなつながりが持っているのでしょうか。また仏教国ブータンと真宗大谷派が友好都市のような形での国交を開いてはいかがでしょうか。またアウンサン・スー・チーさんは龍谷大学を訪問されたようですが、国際室というものを持っているものですから様々な可能性を追求してもらいたいものです。

5 月 5 日付毎日新聞でも紹介されていましたが、マナムニ母子寮という日本の仏教者が宗派を超えて 30 数年にわたって支援し続けている母子寮があります。今その中心になっているのが昨年 2 月同朋新聞でも取り上げていただいた姫路市の大谷派の住職後藤一氏であります。国際室としても、開教区として開かれている北米、ハワイ、南米だけではなく、そのようなアジア諸国での動きや、又ヨーロッパ諸国での動きにも関心を持っていただき、また具体的な援助もし

ていただければと思いますがいかがでしょうか。

原発問題について

我が国の現政権は明らかに経済界と共に原発の再稼働、そしてその輸出等と私たちの教団の目指す方向とは全く逆方向へと舵を切りつつある現状の中で、あらためて原発問題に対する基本方針を示していかなければならない時が来ているようではありますがいかがでしょうか。

教学の課題として、靖国、部落差別、ハンセン病と同じように、原発問題を受け止める意思はあるのでしょうか。同時にそのことの表現として何らかの原発問題に関する出版は考えられているのでしょうか。

又、今回の原発問題関連予算の内容は具体的にどのようなになっているのかを明示していただきたく思います。

宗議会議員選挙条例第2条1項3号「住職の同意」の根拠について

総長は、昨年12月12日から開催された、人権週間ギャラリー展「同朋会運動のこれからに向けて—解放運動の視点から—」の「開催にあたって」において、次のように述べておられます。

「同朋会運動50年、私たちはこの間、部落解放運動を闘う人々をはじめ、多くの差別を受けてきた人々から同朋という内実を厳しく問われてきました。さらには靖国問題により、教団の歴史が照らされ、国家に呪縛された信仰からの解放が求められてきました。

近年50年の歴史は、同朋会運動推進を掲げる教団ゆえ、その根幹を揺るがす差別事件、差別事象の惹起にもがき、また同朋社会の顕現を標榜する教団であるからこそ、同朋教団の名にかけて差別問題、靖国問題の問いかけと願いに応答しようと必死で格闘してきた歴史であったと思われまふ。そこにこそ同朋会運動のひとつの面目があると言ってよいように思います。」と。

私はそのような「同朋という内実を厳しく問われ」る中で、また「同朋教団の名にかけて、願いに応答しようと必死で格闘してきた歴史」の中で、産み出されたのが『真宗大谷派宗憲』であると思ひます。

宗門の本来のかたち、宗門存立の本義、宗門が荷負する大いなる使命を謳った『宗憲』「前文」には、「この宗門の運営は何人の専横専断をも許さず、あまねく同朋の公議公論に基づいて行ふ」とあります。

その「同朋公議」を基底として開かれた本派の最高議決機関である宗議会の議員選挙条例の被選挙資格に「自らの所属する寺院又は教会の住職又は教会主

管者若しくはそれらの代務者の同意を得た教師」(第2条第1項第3号)とあり、「住職の同意」という条件がついています。

宗門の運営は、何よりも一人の他者を信頼することからしかはじまらないのではないのでしょうか。

「同朋会運動の面目」ということと「住職の同意」は両立しないと考えますがいかがでしょうか。総長にお尋ねします。

住職が当該寺院に所属する教師の被選挙資格に同意・不同意という権限を有し得る根拠はどこにあるのか。明確にお答えいただきたいと思います。

中村久子展その後について

昨年議会でも取り上げられましたが、その後8月29日、解推本部が福永年久さん宅を訪ね、その要望等を聞いてこられたようですが、具体的に何かの動きがあったのでしょうか。

これらの問題提起をしてくださった福永年久さんも属しておられる「青い芝の会」の四つのテーゼとしてつぎのように聞いたことがあります。

一つ われらは自らがCP者であることを自覚する。

一つ われらは強烈な自己主張を行う

一つ われらは愛と正義を否定する

一つ われらは問題解決の路を選ばない

親鸞の悪人思想ともつながるこれらの提起を受け止めることを通して、中村久子展の意味を考えることは、真宗教学の課題としてもとても大事なことだと思われまます。

今後の取り組みの予定があればお知らせください。

さて、最後に宗会についてですが

私の属している山陽教区第7組ですが、今年度において組主催の推進員養成講座を計画しました。それもその主たるスタッフをご門徒さんの先輩推進員の方々に担っていただきました。7月に後期教習が予定されていますが、当然のこととはいえ改めてご門徒さんの力を実感していることです。宗会においても宗・参両議会の議員の交流、対話を公式、非公式に関わらず重ねていく機会が持てるようなこと、例えば時には宗政調査会を合同で持つなど、そのことは必ず宗会をより充実したものにするに違いありません。両議会の交流・対話を可能とする政策を強く要望して、以上で質問を終わります。